

「自然史」としての歴史と、その破棄可能性を巡るアドルノの考察  
府川 純一郎（横浜国立大学非常勤講師）

昨年末、長らく待たれていた H.ホワイトの大著『メタヒストリー』の翻訳が刊行されたこともあり、歴史哲学・歴史叙述への関心が高まっているように思われる。その一方で今日は、歴史を意味あるものとして把握することが非常に困難な時期でもある。前世紀末に提唱された歴史の終わりを、つまり歴史を、成熟した民主主義と自由経済の下での、安定と調和の獲得に至る進歩過程とみなす解釈を、今や首肯することはできない。民主主義と自由経済の成熟を促すはずだった情報技術の革新は、各国で深刻な政治的分断と圧倒的な所得格差を生じさせ、世界はあたかも宗教的反目や王侯貴族の存在した世紀へ逆戻りするかのようである。もし（その内部での諸価値の是非はあるにせよ）近代の歩みが転落へと通じるものならば、そこに何らかの意味を見出すのは困難である。今分科会にて報告者は、Th.W.アドルノが歴史におけるこの種の意味危機を真剣に受け止め、独自の歴史哲学を練り上げていたことを指摘しようと思う。

彼の歴史哲学というと、M.ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』が真っ先に思い浮かぶが、本報告では 1932 年の『自然史の理念』と題された講演に焦点を当てる。この講演では「歴史」と「自然」という対立概念の弁証法的関係が論究されているが、その目的は単なる概念分析ではなく、それを通じ、時代が要請している「意味への問い」に、応答することにある。世界大戦が残した、矛盾と終わりなき反目という現実を前に、観念論的哲学は無効化し、それでも哲学にはなお「意味」を、この世界で生きる指針や肯定的価値を客観的に提示することが期待されている、そう彼は洞察する。しかし、あくまで否定的現実が揺るがない以上、意味の確立を目論む哲学は必然的に破綻するか、その捏造に手を染めることになる。アドルノはこうした意味問題と歴史哲学は切り離せないと思ふし、自らが分析対象とする二つの概念を、そうした哲学的立場の符丁として取り扱う。「歴史」には、人間には同一的な運動を拒否し、新たな意味をその度生み出す行動様式があるという、歴史主義的な見解を、「自然」には、人間には所与の存在基盤があり、そこには恒久的な意味が潜んでいくという、存在論的な見解を、それぞれ念頭に置いて論を進めるのだ。そしてこの両者の弁証法を、概念解体に至るまで徹底しようとするアドルノの意図は、そうした意味の薄弱な根拠を暴くことにある。ルカーチの「第二の自然」を通じて、歴史的運動が生み出した新たなものが、慣習という形で拘束的・疎外的な自然に硬化することが指摘され、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』における「儂さ」を通じて、自然は万古不易でなく、移ろうものであることが指摘される。歴史と自然の一見自明の概念対立が解体されることで、それを土台に構築された歴史や生の意味もまた解体されていくのだ。さらにアドルノはこの弁証法的関係から歴史を、歴史的な状態と自然的な状態が絶えず循環する「自然史 *Naturgeschichte*」として解釈する。だが歴史的な運動が（個人と世界の疎外状況から）幾度も異なった、新たな状態を生み出そうとも、繰り返し疎外的なものへと押し戻されるしかないのなら、この歴史形態において意味は完全に無効化される。そ

《第1分科会》  
時間秩序における意味と他者  
—歴史哲学／歴史叙述を問い直す

ここでは世界や歴史に客観的に内在する「意味 Sinn」はなく、歴史とは、単に主観が生じさせている、偶発的で対他的な意味、「含意 Bedeutung」が積み重ねられていくだけの過程となる。これは無根拠な意味を嘯くことで、否定的現実を糊塗しかねない哲学を断裁する厳格な姿勢である一方、この「自然史」の中における個人は、永遠の意味欠如に捕らえられた者として自己を表象せざるを得ない。後に『啓蒙の弁証法』がそうだと批判的に見做された、極端なペシミズムとニヒリズムに満ちた歴史哲学の原型がここにあるとも考えることも出来るだろう。しかし報告者は、講演においてアドルノが「意味」と「含意」の峻別概念運用から、個人の、意味へ向かう「志向 Intention」を析出し、その根絶不可能性を論じていることに注目したい。アドルノは自然史という閉鎖的な歴史形態を打ち立てるだけでなく、その破棄可能性も思考しており、その可能性は、自然史を目を背けずに認識すること、徹底した意味拒絶という否定性において初めて見出されるという、屈折した主張を有している。意味が奪われた世界において、根絶できぬ志向を抱えて放浪する個人という表象は、神学的な色合いを帯びているが、その破棄によって、二度と後戻りすることのない状態が開始されるかも知れないというヴィジョンは、マルクス主義的な「人類前史」とも相通じている。報告者は、この現代性と知的広がり持つ歴史哲学を、後年の『進歩』や『歴史と自由の教説』といった諸講義も踏まえながら、その限界も示しつつ、論じたいと思う。